文窓

ふみのまど

神戸大学文学部同窓会　文窓会
会　長:池上 淑子
事務局:〒657-8501　神戸市灘区六甲台町1-1
TEL(078)881-1212(代)　FAX(078)803-5529
http://www.kobe-u.biz/bunsokai/(文窓会)
http://www.lit.kobe-u.ac.jp/(神戸大学文学部)

8号
2010.9.30

特集/文窓会会員とグローバル

第4回文窓賞 学生レポートコンテスト結果速報

同窓生の近況●文学部のいろいろTOPICS

10月30日(土)は六甲台へ！文学部ホームカミングデイ2010

新任のごあいさつ

文学部長・人文学研究科長
文窓会名誉会長　釜谷　武志

2010年9月から、佐々木先生の後を受けて、文学部長ならびに人文学研究科長の任に就きました。重責に堪えうるか、いささか心もとないところもありますが、微力ながら最善を尽くしますので、お支え下さるようにお願いします。わたしは1989年に神戸大学文学部に赴任しまして、ちなみにそれ以前からの阪神タイガースファンで、真弓監督と同年の生まれです。

神戸大学文学部は、1949年の創設（当時は、文理学部文科）から、今年で62年目になります。現今の一年次生は62回生です。人間で言えば、すでに還暦をすぎて、第二の人生を歩んでいるところでしょうか。そうした長い歴史と伝統をもった文学部も、新しいサイクルに入りはじめています。2004年から始まった法人化にともなう、第1期中期目標・中期計画も、昨年度で終了して、今年度からは新たな中期目標・中期計画が始まりました。

文学部の旧本館が耐震工事を施され、面目を一新してA棟として使用していることは、すでにご存じのことと思います。今年はそれに続いて新館の工事があり、この10月から装い新たに供用を開始します。新館は1971年の竣工ですから、40年近くにわたって教室・演習室としての機能を果たしてきました。耐震工事は数年前に完了していますが、今回は内装工事を中心に、きれいで使いやすい部屋に変身しました。新館をB棟と呼び始めていますが、このたびの内部改修にあたり、教室の名称が若干変更されます。たとえば、みなさんが大人数の講義を受けられた351教室が、B331となります。ホームカミングデーの機会を利用して、あるいは近くにお越しの折りに、改装後のB棟をぜひ一度ご覧になってください。

また、大学院教育に関する二つの大きなプロジェクト、「若手研究者インターナショナル・トレーニング・プログラム」と「古典力と対話力を核とする人文学教育」も三年目を迎えました。大学院生が自主的に研究活動を進めて、その成果を積極的に発信していく方法がほぼ確立してきました。加えて、日本学術振興会の「組織的な若手研究者等海外派遣プログラム」に、人文学研究科が応募した「国際連携プラットフォームによる東アジアの未来を担う若手人文学研究者等の育成」が採択され、三年間にわたってプログラムが実施されます。若手研究者にとっての研究環境は、格段に整備されてきています。

大学をとりまく諸々の状況はなかなか厳しいところがあります。学生の就職状況も、以前とくらべてかなり難しくなっています。しかし、文学部の卒業生は、旧来のやり方にとらわれずに、自ら新たな道を模索して問題を解決することを特徴としています。先の見えにくい時代にあってこそ、その本領を発揮して活躍してくれると信じてやみません。

同窓会の方々も、後輩たちを暖かく見守り、多方面から支援して下さいますように、お願い申し上げます。

母校「文学部」が担う社会的役割

文窓会会長　16回生
池上　淑子

「文窓会」会員の皆様には、お元気でご活躍のことと存じます。

さて、国立大学が法人化されて6年経ち、大学を取り巻く状況は一変しました。いまや、大学は知識情報産業の中に組み込まれ、社会的「評価」（世界ランキング、日本ランキング）を受ける立場になって大学間での「競争」も激しくなってきています。大学運営も大きく変わり、「産学共同体」の成果や「研究資金」の獲得に重きが置かれ始めました。何ら利益を生まないとみなされる人文学の分野は、残念ながら、不当に低い評価をされがちです。これは世界的な傾向だとか。英国の伝統あるミドルセックス大学の哲学科が廃止になり、日本でも文学部そのものがなくなった大学が2、3に止まりません。先般も、大阪女子大の文学部廃止決定を受けて、卒業生が反対運動されている記事が載っていました。文学部卒業生としては「対岸の火事」では済まされない気がして憂慮するところです。

加えて、アメリカを初めとして世界の国々が政治的、経済的に不安定であり、無論、昨年政権交代があった日本も例に漏れず混迷度が増すばかりの社会情勢にあります。人文学関係者の不安は増すばかりですが、「人文知」（一般的にはいわゆる教養とみなされる）は、例えば言語学、歴史、哲学、美術などですが、個人においては生き方の指針を示すものであり、ひいては国家の理念を作る基盤になるものであることを再認識して欲しいと願う次第です。

ただ、こうした中で母校文学部が健闘していることを皆様にご報告したいと思います。

昨今、日本の大学が"国際化"の波に揉まれているのはご承知のとおりです。母校文学部の人文学研究科海港都市研究センターは、昨年11月に、東アジア圏内での人と文化の出会いと交流をテーマとして、東アジアの主たる海港都市に位置する4ヶ国6大学との「海港都市国際学術シンポジウム」を主催し、今後「東アジア圏」の"架け橋"たるべく意気込みを示しました。

また、今年は、世界大学ランキング第4位のオックスフォード大学の日本語学科2年生12名を2012年秋から特別聴講生として受け入れるというビッグなプロジェクトが進行中です。これが実現すれば「国際化」をキーワードとする神戸大学のコアーにもなる可能性を秘めているものと期待しているところです。

このように躍進する文学部のますますの発展を願って、文窓会会員の皆様には一層のご支援・ご協力をお願いする次第でございます。

最後になりましたが、文窓会会員の皆様のご活躍とご健勝を心より祈念申し上げます。

神戸大学文学部生の夢、ビジョン、活躍を応援する

第4回 文窓賞

学生レポートコンテスト 結果発表

神戸大学文学部で学ぶ学生たちのさまざまな生き様を応援する＜文窓賞＞レポートコンテストは、今年から全文学部生の応募受付となり、13名の応募がありました。9月17日に釜谷武志文学部長、鈴木義和、緒形　康の3名の先生方と文窓会役員による選考会が開かれ、白熱した討議の結果、下記の作品が受賞作に選ばれました。

■最優秀賞（表彰状と賞金10万円）

おめでとう

「強烈なインド、初めてのバックパッカー」　森田 祐未（英米文学専修3回生）

インド旅行の体験記は、このような感想、結論が多く独自性に欠けるとの意見もあったが、生と死に対する作者の意識の変革は高く評価された。特にボートマンから学んだことを忘れずに生きていって欲しい。

■優秀賞（表彰状と賞金3万円）

おめでとう

「オーストリアでアルバイト経験」　原田 沙耶（社会学専修4回生）

単なる留学では学ぶことが出来ない、日本文化を紹介する喜びとアルバイトで得たいろいろな体験。作者の感受性は若者らしく、多くの選考委員の共感を得た。

「文学部生としての意地」　谷本 響司（人文学科1回生）

文学部で学ぶ誇りを持って、時代そのものを変えるような考えを、社会に提案をするため、勉学に励みたいという作者への拍手は大きかった。選考委員全員が今後の活躍を期待している。

「普段接する機会がない人と出会って」　三宅 陽平（哲学専修4回生）

何事にも消極的な若者が増えるなか、日本が直面する諸問題に自ら飛び込み、奔走する作者のチャレンジ精神は素晴らしく、文窓会の誇りである。

佳　作（図書券5,000円分）

「父と野球、僕の決断」　姉川 拓生（人文学科1回生）

「今、重なる～識字教室体験談～」　和木 友絵（人文学科1回生）

＊優秀作の表彰は10月30日の第5回文学部ホームカミングデイにて行います。
＊入賞者の受賞レポートは冊子にして同日の文窓会総会時に配布いたします。

選考を終えて

昨年は就職活動に関するレポートが多かったため、本年から1・2年生も応募できるようにした。その結果、応募数が増えただけでなく、作品のモチーフも広がり、読み応えのあるレポートが多く、内容も充実していた。特に1年生の作品は高く評価され、文窓賞の可能性を大きくした。

（総括・受賞作へのコメント
審査委員長 日高 健一）

◎選考基準：元気で個性的な学生生活の独創性や発展性に対する評価と、その活動や体験が社会をどれだけ納得させる力があるかによって選考。

◎選考委員：釜谷 武志学部長（中国・韓国文学教授）
鈴木 義和（国文学教授）
緒形　康（東洋史学教授）
日高 健一　池上 淑子　鞍井 修一　花木 直彦
廣野 幸夫　西川 京子　武藤 美也子　田中 睦子

人生を大きく変えた中国で学んだもの、感じたこと。

神戸大学文学部には、大学院を含めさまざまな国からの留学生がいます。中でも中国からの留学生は、5月1日現在で57名と多く、留学生全体の65.5%を占めています(※下記データ参照)。母校がアジアを中心にグローバル化するこの傾向は、今後ますます強まっていくことは確実でしょう。

そんな背景に加え、今年は上海万博開催などで大いに注目を集めた中国。そこで、今号では中国と深い関わりを持って来られた文窓会会員お二人にインタビューしてみました。その二人とは、長年役員を務めてこられた日高健一さん(芸術学専攻9回生)と新世代役員の西川京子さん(西洋史学専攻17回生)です。文窓会では昨年度から新旧役員の業務の引き継ぎを進めていますが、このタイミングに今だからこそ聞ける話を伺いました。

熱く中国を語る(左から)日高さんと西川さん

■神戸大学文学部・大学院の留学生数

(2010年5月1日現在の在籍数)

	留学生数	うち韓国	うち中国
文　学　部	9	(3)	(3)
人文学研究科※	76	(8)	(53)
文化学研究科※	2	(1)	(1)

※共に大学院。2006年度募集まで大学院は2年間の修士課程(文学研究科)と3年間の博士課程(文化学研究科)に分かれていた。2007年4月にこれらを改組。現在は5年間一貫の大学院「人文学研究科」となっている。

生きる喜びを満喫させてくれた中国の古陶磁や古玉(ぎょく)器をライフワークに。

日高　健一さん　芸術学専攻　9回生

Q.　日高さんは卒業後、広告代理店で広告マンとして活躍され、それと並行して、本格的な中国美術の蒐集と研究に打ち込んでこられたそうですが、どんなことから中国に関心を向けられたのですか?

日高　僕は電通に入社して定年まで勤め、現在は中国の骨董品を扱う店をしながら中国の歴史や文化を自分なりに研究してきました。そのきっかけとなったのが、神戸大学文学部で当時芸術学の教授であった小林太市郎先生との出会いです。和漢洋のさまざまな時代の美術や文学に通じ、視野の広い芸術論を展開しておられた美学者であり、中でも中国陶磁に関しては今でも陶磁器界の人と話をするときに小林先生の弟子といえば一目置かれるほどのすごい方でした。

先生の著書の中でも名著とされる「中国陶瓷(とうじ)見聞録(1943年刊)」は、18世紀のジェスイット会の僧侶ダントルコールが、窯業の中心地・景徳鎮に布教の名目で潜入して、口伝えされていた技術の詳細を手紙に書いて本国フランスに送った報告書があるのですが、これを翻訳した大作です。単なる翻訳書ではなく、小林先生が用語や技法にきめ細かく膨大な注釈をつけられたところに価値があり、中国陶磁史研究のバイブルといわれている1冊です。

僕は胸を躍らせて講義を聴き、中国陶磁の魅力に引き込まれていきました。たまたま祖父が古道具屋をしていたことも、強く惹かれた一因かもしれません。

Q.　その学生時代の中国陶磁への関心は社会人になって、どうなりましたか?

日高　電通ではテレビや新聞のコマーシャル制作部門に配属されたのですが、入社3〜4年目に、姫路市にある宝石会社の広告を個人的にアドバイスしたことがあり、キャンペーンがヒットして会社が急成長したんです。そこ

の社長さんが仏像の収集家で、芸術学を学んだ僕とウマが合って、宝石の仕入れに香港やアムステルダムまで連れて行ってくださいました。

普通なら見ることもない仕入れ先での交渉、そのときの社長さんの言動に、僕はビックリしましてね。仕入れたいと思った宝石にとことん惚れ込み、褒めまくりながら、長時間ねばって値引きを求めるんです。仏像に対しても同様で、相手が根負けするほどすさまじいまでの執着心なんですね。僕はこの執着心こそ生きている証であり、より魅力的なものを求め続ける原動力だと知りました。蒐集すればするほど人生が楽しくなることを学んだのです。

Q.　ここから日高さんの中国美術のコレクションが始まったのですね？

日高　最もよく行った香港で、最初は翡翠や玉(ぎょく)を買って帰りました。父を早く亡くしたため、母が小さな骨董屋をしていて、翡翠や玉と組み紐を合わせてアクセサリーにして売っていたんですね。あるとき、店に中国の物が置いてあるのを見て、中国人留学生が訪れ、親しくなりました。当時の留学生はたいへんなエリート家庭の出身なのです。その留学生の案内で、休暇を利用して初めて中国本土に渡り、解放直後の北京や天津を訪ねる機会を得ました。当時の中国は、政府が経済の近代化を進めるために特別経済解放区を作り、各国からの出資を仰いでいた頃でしたから、僕も留学生の親や親戚から盛んに中国への投資を勧められましたよ。結局4つの会社を合弁で設立して、僕自身は会社員なので経営にはタッチしませんでしたが、株主総会や役員会で年に4、5回中国へ行き、会議の後は当時あちこちにできはじめた旧貨や骨董品の自由市場に足を運んでは、自分の趣味に合うものを買うのが何よりの楽しみになったんです。市場といっても、誰もが地べたに品物を並べて売っていた。1980年代の初めの頃です。ちなみに設立した会社はその後、解散しましたが。

Q.　今の中国からは想像できないような頃の様子ですね？

日高　ちょうど1976年に周恩来、毛沢東が亡くなり、四人組の逮捕、翌77年に鄧小平が復活して文化大革命の終了が宣言されたのですが、そこから市場経済体制への移行へと中国社会が大きく変わっていきました。僕が初めて中国本土を訪ねたのは、その過渡期の頃です。年ごとに僕の古陶磁や古玉器のコレクションも増え、その一つ一つを本で調べて時代や産地などを記録するのが何物にも代えがたい大きな楽しみでした。そんな中国文化への熱い思いを抱きながら中国へ通ううちに、各界の要人にも人脈ができていったんです。

1986年に北京で初めてのゴルフコースが日本企業の出資でオープンすることになり、日本でメンバー募集の広告を企画したんですが、話題性を狙って、イラストレーターに最高実力者・鄧小平氏の長女で画家の鄧林さんを起用したんです。そんな大胆な企画ができ、実際に依頼に行けたのも、忘れられない思い出です。

Q.　陶磁器研究の専門家が集まる国際会議で発表されたこともあるとか？

日高　1997年に香港が中国に返還される記念事業として、前年に香港文化センターで北京大学主催の国際鈞瓷(きんじ)検討会という国際会議と展覧会が開かれ、中国政府に夫婦で招いていただいたのです。鈞瓷は今から900年ほど前の北宋末期に御用窯として名を馳せた特別な焼き物で、窯変によるさまざまな色合いが実に美しいのが特色です。僕はオパール現象と呼ばれるこの色合いの独特の変化に、太陽が西に沈むときの東の天空を見ました。夕焼けを反映して色を変え、みるみる暗くなる一瞬の美しさを写したものに違いない。それを私たち人間は「なぜ芸術に惹かれるか」という観点から原稿にまとめ、コレクターとしての立場から発表のチャンスを与えていただきました。これは私のコレクション人生の中でも最も晴れがましい出来事でした。

中国が開放政策をとった頃から今日まで、中国は私自身の生きがいや人生観に深く関わり切り離せない存在となっています。私のコレクションは中国経済と共に生きた証、生きる喜びを満喫させてもらった証です。この貴重なコレクションを散逸させることなく、私の死後は中国で収蔵されることを願って、今、全品の記録を図録の形で作成しています。

Q.　最後に、日本人にはなかなか理解しにくい中国の人や社会について、ひとことを？

日高　中国人の社会構造として儒教が最大のベースとなっている、しかしその儒教の根本を日本人はあまりわかっていないと感じています。ヨーロッパの聖俗2元論に対して、中国は一元の世界。聖はなく、俗のみ、つまりこの世界をより幸せに生きることによって救済されると考える。儒教とはそんな宗教なんです。キリスト教のような神との契約などなく、この現世の富や幸せを得るための個人と個人の契約、つまり横の関係の契約があるだけ。それが結ばれることが、唯一の俗なる世界の幸せに通じることになるんです。共産政権を批判することも、あの世のことも関係ない。現実に生きている世界だけ。この感覚の大きな違いを常に頭に置いて物事を見ることが大事だと思います。

1日で人生が変わって公認会計士へ。香港返還にも立ち合えた11年の香港生活。

西川京子さん　西洋史学専攻　17回生

Q. 西川さんは公認会計士として独立して仕事をされていますが、大学での専攻は西洋史。異色のキャリアですね？

西川　公認会計士になったのは35歳のときです。それまでは、結構崖っぷちの人生だったんですよ(笑)。大学を卒業する頃は「女子大生亡国論」が盛んにいわれた時代で、女子の大学進学率が上がっても、まだまだ自立して働こうとするのは少数派。大卒の女子には今と違って就職口が本当になかったんです。

24歳の時に友人に誘われて大阪の本町で画廊を始めたんですが、長くは続かず、20代はほとんどブラブラしていましたね。その後結婚して東京で暮らしましたが、事情があり33歳で離婚、実家へ戻りました。仕事を探して何度も面接を受けては断られ、まさに八方ふさがりの状態でした。

Q. その後、なぜ公認会計士を目指すことに？

西川　これから先、どう生きていけばいいんだろうと、ある日、大学時代のテニス仲間で工学部出身の友人に相談したんです。SE(システムエンジニア)をしている彼も、体を壊して仕事先を替えていました。彼いわく「男社会で30過ぎた女が一人で食べていくには、会計士など堅い仕事がいい。実は自分も監査の事務所から誘われている。今後の監査法人には、コンピュータがきっちり使える人と英語が使える人が求められている」と。想定外の職種でしたが、それも面白いかもと思って聞いていると、「じゃ、一緒に勉強しないか」という話になり、三宮からすぐ梅田の書店へ行って公認会計士の受験本を買い、「まず簿記を習わないと」と、三宮に戻りその足で一緒に小さな簿記学校へ駆け込み申し込んだのです。

後になって会計士の知人にその話をしたら、「僕が相談されたら、やめとけといっただろう」といわれたくらい無謀な選択でしたが、お互い工学部と文学部、まったく専門外で知らなかったからできたのだと思います。その後、友人は本業が忙しくなって中断したのですが、私は彼のおかげで1日で人生が変わったんです。

簿記を習った後は、小さな公認会計士の予備校に2年通いました。33歳で勉強を始め35歳のとき、運良く2回目の受験で合格したんです。藁にもすがる思いで飛び込んで、生まれて初めてというくらい勉強しました(笑)。

Q. 念願の会計士としていよいよ社会へ？

西川　いくつかの監査法人を訪問して年齢と女性という理由で断られましたが、「その経歴も面白い」とある大手監査法人が受け入れてくれて、数年働いたあるとき、その海外の提携事務所であったクーパース・アンド・ライブランド(C&L)香港事務所が現地駐在員を求めてきたのです。当時は、香港へ、あるいは香港経由で中国へ進出する日系企業が増え始めた頃でした。私は何か変化が欲しいと思っていたし、学生時代は西洋史を専攻し「英国の帝国主義」をテーマに選んだこともあり、1997年の香港返還と「一国二制度」という前代未聞の制度変更への関心も強かったので、駐在を希望。運良く決まったのです。当時は欧米の人気が高く、社内では「アジアの駐在は大阪事務所の中年の流れ者が行くところ」などといわれていましたが、本当にラッキーでした。

Q. 香港での仕事の内容は？

西川　現地では日系部門のマネージャーとして、主に新規クライアントの獲得のための営業と、獲得したクライアントへのメンテナンス、つまり会社設立から監査を受け、税務申告、M&Aなどの事業再編、時には撤退や清算などのすべてをサポートしてスタッフにつなぐ仕事をしていました。赴任は1990年1月から3年間の契約でしたが、任期が何度も延長され、結局2000年12月まで11年間香港で暮らしました。さまざまな国の人との交流があり、思いがけず3年経ったときの契約更新時にC&Lのパートナー(共同経営者)に登用していただき、香港返還の歴史的瞬間にも立ち会えて、仕事でも個人的にもたいへん充実した40代だったと思っています。

Q. 責任の重い仕事も増えてきたわけですね？

西川　広い個室や専属の秘書のいるパートナーになると、マネージャー時代とは得られる情報の質と量が格段に違って、経営に携わる醍醐味を実感できました。日本の監査法人では考えられないような貴重な経験でしたね。途中、C&Lが合併して香港事務所もプライスウォーターハウス・クーパース(PwC)香港となったのですが、両社の日系部門を統合する過程もいい経験になりました。

2001年に帰国して元の監査法人に帰任したのですが、当時ますます中国に進出する企業が増えて、日本でも東京に中国ビジネスグループを作ることになったんです。その設立責任者となり、今度は中国と関わりを持ちました。2007年に監査法人を退職して、今は香港・中国関係のコ

ンサルタントや大学院で中国関係の講師、財団法人や公的機関の監事、委員などを少しずつ手がけています。今も私にとって香港は第二の故郷であり、香港事務所時代のパートナーたちとは運命共同体のような強い絆でつながっています。

Q. 香港や中国に感じる魅力とは?

西川 昨年6月に、元同僚で香港人パートナーの早期退職パーティが、北京の「万里の長城」で開催されました。元は日系企業の担当で、中堅スーパーのヤオハンの破綻、山一証券の自主解散にあたり香港で共に苦労した仲間です。私は大阪、東京、香港事務所で仕事をしてきましたが、香港のパートナーが一番のパートナー、どんなことでも話せて最も信頼がおける存在です。個と個が信頼を結び合えて、一度信頼関係を築いたら日本人より強い絆で結ばれる。そこが香港のビジネスの世界の大きな魅力ですね。

またそのパーティがすごくて!万里の長城の登り口あたりの石舞台に大きな真っ白いテント、真っ白なクロスのかかったテーブル…ペニンシュラホテル北京の厨房がしつらえられ素晴らしいフランス料理がサービスされました。日が落ちると、なんと万里の長城が特別にライトアップされたのです。中国の、儲けるためにはどんな苦労もいとわないバイタリティを実感しました。プライベートなパーティでも、お金さえ払えば万里の長城が使えてライトアップまでできる。なんか日本の方が規制が多くてより共産主義的かも?と感じます。

中国ビジネスグループの中国人マネージャーがあるとき語っていましたが、「日本人は、中国をすごく好きか、すごく嫌いかのどちらかで、とても極端。もっと普通に接するのがベストだと思う」。それ、私も同感です。

インタビューを終えて。

日高さんは1980年代の初めから、また西川さんは1990年から、それぞれ香港・中国と関わった貴重な体験を伺いました。話を聞いて感じたのは、どちらも「オープンマインドで相手の懐に飛び込んでみよう」という、好奇心全開の前向きな姿勢が共通点としてあったこと。状況や対象は変わっても、グローバルなコミュニケーションの鍵はきっとそれに違いない。そんな確信を抱かせてもらえた取材でした。

(文責・たなか)

海港都市国際学術シンポジウム「越境する人々とナショナリズム」を終えて

「民族的・文化的他者といかに共存してゆくか」という問題は、グローバル化がさけばれる昨今ではよりいっそう重みを増した喫緊の課題です。神戸大学文学部では、2005年に海港都市研究センター(以下、海港センター)を設立し、歴史的につながりの深い東アジアにおける人と文化の出会いと交流、対立と理解の仕方、そして新しい文化創造の可能性について追究してきました。

海港センターの中核的な活動として、海港都市国際学術シンポジウムがあります。これは、東アジアの海港都市における異文化接触の諸相を素材として、国内外の研究者がつどい、新しい文化創造の可能性について協議する場です。2005年は韓国木浦、2006年は台湾台北、2007年は中国広州、2008年は韓国釜山と、年に1回のペースで開催しており、2009年度は神戸で開催するはこびとなりました。

11月26日〜28日、「越境する人々とナショナリズム」という共通テーマのもと、国内のみならず、中国、韓国、台湾、オーストラリアなど海外からも、多彩な顔ぶれの研究者が一堂に会しました。26日はクラウンプラザホテル神戸、27日は神戸大学の瀧川記念学術交流会館・文学部学生ホールと会場は移動しましたが、両日とも80名程度の参加者を得て盛況。文学・歴史学・社会学・都市工学など学際的な観点から、他者流入によって生み出された海港都市の社会・文化の特質について活発に議論され、日韓中の三カ国語が飛び交う会場は熱気に包まれました。28日は、海外移住と文化の交流センター、白鶴酒造資料館、人と防災未来センターなど、神戸市内のフィールドワークです。最後の南京町では、皆が言葉の壁を越えて交流し、互いに親睦を深めました。

本会は、文窓会の多大なご尽力をたまわり、盛会のうちに終えることができました。この場をお借りして、皆様のご厚意に深くお礼申し上げます。

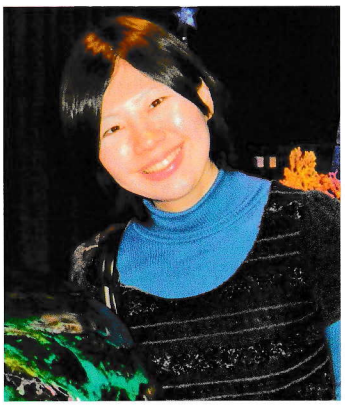
本会の特徴は、教員もさることながら、大学院生や研究員など若手研究者の熱意と努力によって支えられていることです。毎年多くの若手研究者が、本会で研究報告を行い、海外の研究者と交流することで、国際的な経験を積んでいます。一方で彼らは、会場設営や配布する予稿集の作成、当日の討論での通訳など、まさに「縁の下の力もち」として本会の運営を支えています。オーストラリアから参加した研究者は、日韓中の三カ国語で綴られた分厚い予稿集を手にして、短期間で翻訳・製本まで行った神戸大学の底力に対する驚嘆の念を隠しませんでした。今後も、後輩たちの学問に対する熱い思いを応援していただければと思います。

なお、本会での研究報告の一部は、海港センター紀要『海港都市研究』(5号)に掲載されています。神戸大学学術成果リポジトリ(http://www.lib.kobe-u.ac.jp/kernel/)でも公開されておりますので、合わせてご参照下さい。

神戸大学大学院人文学研究科　　添田 仁

平成21年度卒業生からの近況コメント

文窓会に新しく仲間入りしました!



定時制単位制高校で地歴公民の教員として。

中村華子　西洋史専修卒業

私は、兵庫県公立高校教員採用試験に合格し、定時制単位制高校にて、地歴公民を教えています。また、二年次の担任や、バスケ部の顧問として充実した毎日を過ごしています。社会人も教員も1年目の私にとっては、全てが新しく、驚いたり感動したりすることばかり。失敗しても、「なんとかなるよ」と言ってくださる同僚の先生方に助けられて、笑顔を忘れずに働くことができています。「できる・できない」ではなく「やる・やらない」が大切だという気持ちを胸に、自分らしく頑張りたいと思っています。

♪いっこでもにこにこ ～地元新潟でがんばってます。

須田和恵　国文学専修卒業

平成22年3月に卒業し、地元新潟の製菓会社に勤務しております。早いもので社会人生活も5ヶ月目・・・現在、営業本部という部署で、全国の営業マンの業務支援や販促企画の立案、キャンペーン運営など、多岐に渡るお仕事をさせて頂いています。急成長企業ゆえの人手不足と成果主義のため、早朝から深夜まで仕事に追われていますが、上司や家族、学生時代の友人達に支えられながら一人前になろうと必死な日々。へこたれないでいられるのは、大学で勉強にバイトにサークルに、充実した4年間を過ごせたおかげと感謝しています。

岩手朝日テレビでアナウンサーと記者を努める日々。

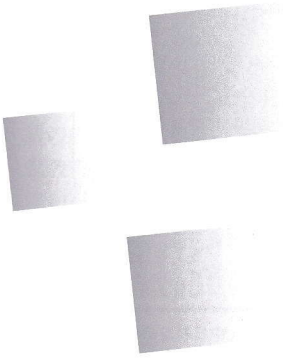
塚本京平　社会学専修卒業

岩手県のテレビ局、岩手朝日テレビでアナウンサーと記者を務めています。毎日取材に走りまわり、たまにニュースを読んだり番組に出演したりしています。慣れ親しみ友のいる関西を離れるのはつらかったのですが、今は自分がやりたかった仕事を精一杯やっています。関西を離れた決断が間違いじゃなかったことを証明するために、これからも自分に厳しく過ごしていきます。

書店で医療関係担当の営業として、いろんな体験を。

谷井章宏　芸術学専修卒業

私の仕事は、書店で医療市場を担当する営業です。まさか、文学部を卒業して医学部へ通うことになるとは思いませんでした。最近は、もっと勉強しておけば良かったと後悔するばかり。海外の出版社から営業の方がやってきて、英語で会議したときなんて全身から冷や汗が出ました。そして、外国人営業の押しの強さに胃がキリキリしました。世界は広いです。ちなみに、将来の夢は秘密です。



神戸によく似た街、横浜で銀行員として。

森岡芳衣　国文学専修卒業

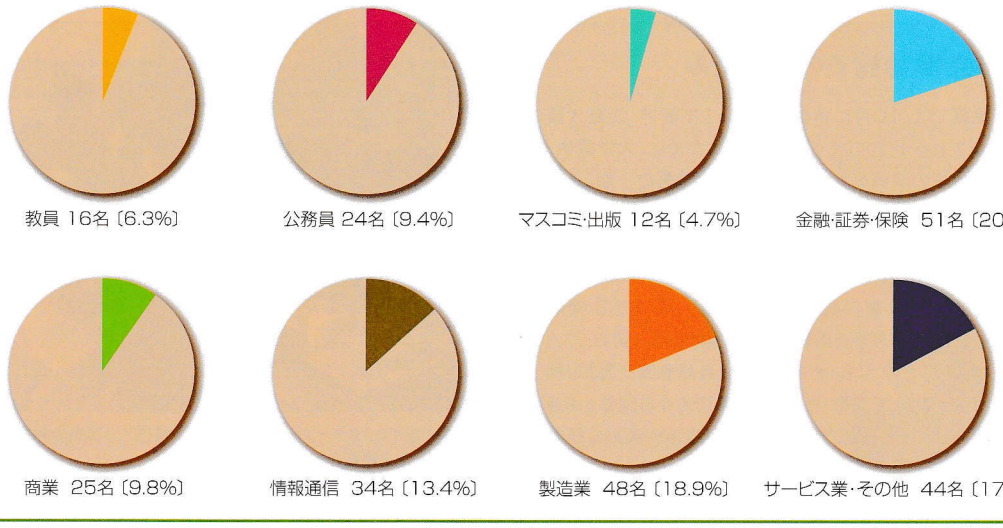
神戸を離れて5ヶ月、今は横浜市内で銀行員として働いています。仕事は店舗にいらっしゃるお客さまの案内を行っていますが、覚えることばかりで毎日新鮮な気持ちをもって働いています。また、神戸と横浜は似た雰囲気があり、よく大学での4年間を思い出します。夏か秋には一度神戸に戻り、大学時代の仲間と語り合いたいと思うばかりです。

文学部卒業生の就職先って？

今、文学部そのものを取り巻く環境は厳しさを増しています。利益を生まないとみなされる人文学の分野は果たして"お荷物"なのでしょうか?ここに、今春を含む最近3年間の文学部卒業生の就職先データがあります。神戸大学文学部は、国立大学の特徴であったはずの少人数教育を今も特色として、豊かな人間性を育むことのできる希有な場。それを物語るような実績にご注目ください。

（2011年度 神戸大学文学部案内を参考に構成）

■過去3年間(2007～2009年度)の就職先（総数254名）



※原稿（コメント）は2010年8月にいただいたものです。

えっ、フリーズドライで水に浸かった古文書がよみがえる!?

奥村　弘教授　日本史学

ことの発端は編集部宛に送られてきた、2010年3月25日付けの新聞記事であった。「歴史に即席めん技術～神戸大が再生　豪雨で被災の古文書」という見出しが目を惹く中日新聞の切り抜きで、送り主は三重県にお住まいの国文学8回生の萩紀男氏。地方紙ネットワークによる神戸新聞発の記事であった。そこに登場した真空凍結乾燥機と神戸大学大学院人文学研究科の奥村弘教授を追ってみた。

Q. 真空凍結乾燥機といえばフリーズドライ食品を製造する機械ですが、どこに置かれどう使われているのですか?

奥村　実験用サイズの機械で文学部のC棟3階会議室準備室にあり、いろいろな乾燥実験をしています。もともと考古学の分野では1970年頃から木簡の保存などに使われていた技術ですが、紙史料にも応用できるのではと考えて2004年台風23号による水損史料を真空凍結乾燥し、よみがえらせることができました。2009年8月に大きな被害を出した兵庫県西、北部豪雨では、たくさんの史料が泥水をかぶりましたが、これまでなら廃棄するしかなかったものを冷凍保存し、11月に科学研究費S*で導入した真空凍結乾燥機で順次復元してきました。

＊科研費(科学研究費補助金)Sは、全ての分野における研究者の自由な発想に基づく研究から、審査を経て独創的・先駆的と認められた研究に対する助成。その平成21年度の基盤研究 (S)として研究代表者・奥村弘教授の「大規模自然災害時の史料保全論を基礎とした地域歴史資料学の構築」が、神戸大学では文系で初めて採択された。
http://www.lit.kobe-u.ac.jp/~chiiki/nisshi.html

3　阪　全　D版　2010年(平成22年)3月25日(木曜日)

昨年夏の兵庫県西、北部豪雨で水に浸かった歴史資料を再生させるため、神戸大がインスタント食品の製造に使う「真空凍結乾燥機」を活用し、古文書などの乾燥作業を行っている。水損した資料は冷凍保存されているが、この機械を使うと水が氷に戻らないまま気化になるため、紙へのダメージが少ないという。仕上がりは良好で、江戸後期の年貢の状況を記した古文書などが無事よみがえった。

歴史に即席めん技術

神戸大が再生　豪雨で被災の古文書

関西発

真空凍結乾燥（フリーズドライ）は、カップめんの具などインスタント食品を作る際に使われる技術。真空、超低温（零下約六十度）の環境をつくり、食品の水分を気体に変えて取り除く。

紙などに応用する研究は、神戸大学の分野で使われるようになり、近年は水損資料の再生も試みられてきた。

昨年八月の県西、北部豪雨では多くの文書や絵図、写真などの資料が泥水をかぶり、神戸、千葉方法に比べて「戸大文学部が組織する「歴史資料ネットワーク」が、佐用町と共同で凍結乾燥が必要と判断し、五十点の古文書の東ことができ、よかった。被災した資料を救市の民家から約六千点を、冷凍保存。昨年末に機械を購入して実験を救出した。そのうち、約一週間については乾燥させた。仕上がりはよく、文字も読めるの状態などから真空凍結した厚さ約五センチ、約六百枚の古文書の中には、明治時代、播磨地方西部の土地権利関係がどうなっていたかを示す台帳や戸籍簿など、地域の歴史を知る上で欠かせない資料が含まれているという。アルコール消毒などを施し、今年夏をめどに所有者に返却する。

作業は、同様の機械を所有する神戸市埋蔵文化財センター（同市西区）にも協力を求め、手分けして進めている。同ネット代表の奥村弘教授は「大切な古文書などを再生することができ、よかった。被災した資料を救せない資料が含まれているという。アルコール消毒などを施し、今年夏をめどに所有者に返却する。

作業は、同様の機械を所有する神戸市埋蔵文化財センター（同市西区）にも協力を求め、手分けして進めている。同ネット代表の奥村弘教授は「大切な古文書などを再生することができ、よかった。被災した資料を救せない資料が含まれているという。アルコール消毒などを施し、今年夏をめどに所有者に返却する。

凍らせた古文書を再生させる「真空凍結乾燥機」＝神戸市灘区の神戸大文学部で

中日新聞の切り抜き

Q. 史料とはどんなものでしょう?

奥村　国や県などによる指定文化財だけが歴史資料ではありません。古文書や古書、明治・大正・昭和の新聞や写真、絵、昔使われていた物づくりや生活のための道具といった、その地域の生活や文化の記録が、災害とともに大量に廃棄されてしまいます。史料の保全は災害復興に欠かせない課題です。そのため1995年の阪神・淡路大震災を機に、広範な歴史学会と市民が協力しながら、歴史資料の保全と活用を進めるボランティア組織「歴史資料ネットワーク」を開設し、神戸大学文学部地域連携センター内に事務局を置いてさまざまな地域と連携して活動しています。

伊丹市立博物館での取り組み

同博物館では、10月に秋季企画展として阪神・淡路大震災展が開催される予定だ。その展示事業のために、大学院生・学生による当時の関係者からの聞き取りが授業の一環として行われた。地域連携センター研究員や震災史料整理にあたる博物館スタッフも交えての聞き取りの講師は、伊丹市立図書館館長の高城拓也氏。当時、伊丹市の街路課職員として県庁に出向していた同氏は、震災直後伊丹市に移り、橋の復旧、その後は倒壊した阪急伊丹駅と周辺の震災復興事業に携わった。「復旧より復興を」というコンセプトのもと、当時意識が高まり始めていたバリアフリーを先取りして、障害者の方々の団体とも連携し意見を聞きながら進めた大規模な取り組みの貴重な証言が記録された。

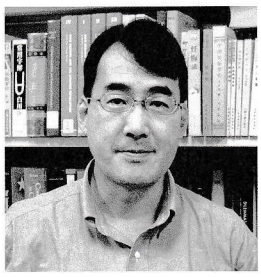
聞き取りをするドクターコース2回生の金 潤煥(左)、1回生の澤井廣次(右)、学部生日本史専修の松本充弘(中)の皆さん。

「神戸・オックスフォード日本学プログラム」について

緒形 康教授　東洋史学

神戸大学文学部は2012年秋学期より、オックスフォード大学東洋学部と共同して、「神戸・オックスフォード日本学プログラム」をスタートさせます。オックスフォード大学東洋学部が推薦する2年次の日本学専攻学生全員（定員12名）を1年間受け入れることを通じて、このプログラムを独自の教育プログラムへと発展させてゆきたいと考えています。すでに、「神戸大学ビジョン2015」〔チャレンジ・フェーズ　2010～2012〕の達成に向けて、全学を挙げて、豊かな教養・高い専門性・高度な語学力を有し、多様なフィールドで活躍する指導的人材を育成するためのカリキュラムの模索がなされています。このプログラムは、そうしたチャレンジ・フェーズに相応しい、本学の国際化水準を向上させる上での代表的なプログラムとなるでしょう。

オックスフォードからの参加学生は、神戸大学文学部が提供する、秋・春学期各10単位分の日本語の授業（午前）と、秋4単位・春6単位分の専門科目の授業（午後）を履修します。日本語の授業については、留学生センターが開講する「日本語予備教育コース」に参加してもらいます。専門科目の授業は、文学部が海外留学生に開放している日本学関係を中心とした科目群から自由に選択した上で、日本人学生と一緒に受講することになります。参加学生は、それぞれ1人の指導教員から指導を受け、同時に学生チューターから、学習のみならず生活面を始めとする様々な援助を受けます。文学部の1学年定員の実に1割近くをオックスフォード大の学生が占めるという学習環境の変化を生かし、文学部学生の英語力の向上に資する課外活動（弁論大会、日英文化講座等）を準備し、その成果を学内、さらには学外へと発信してゆきます。



オックスフォード大学の日本学は、1964年に東洋学部の正規のコースとなって以来、1980年には日産・日本文化インスティチュートの現代日本研究を傘下に加え、現在の盛況に至っています。今回、神戸大学文学部との新たなプログラムを発足させる上で多大なご尽力を頂いた、東洋学部副学部長（日本語・日本語学研究所所長）のフレレスヴィッグ教授が所属するHertford Collegeは、そうしたオックスフォード日本学を推進する中心カレッジの1つですが、その創設は12世紀にまで遡り（カレッジ誕生は1740年）、トーマス・ホッブス、ジョナサン・スウィフト、エヴリン・ウォー等、錚々たる文化人を輩出してきました。

なお、「神戸・オックスフォード日本学プログラム」は学生交流を中心としたものですが、このプログラムを契機に、両学部の教員同士の学術交流、大学院人文学研究科の大学院生の研修派遣等が行えるように、部局間協定を締結する方向で協議を進めております。今後の文学部の教育研究の新しい展開にご期待下さい。

文窓会主催、初の「新入生歓迎ティーパーティー」を開催（5月19日）

美しい青葉の下で海側のガーデンテーブル＆ベンチに集って…のはずが、あいにくの雨。そこで本館1Fの学生ホールにテーブルを並べ、コーヒー、紅茶など飲み物とパーティーサンドやプチケーキ、お菓子を用意。第1回の開催でした。

あ、先生や先輩って話しやすいんだ！

この会の趣旨は、交流だけではなく、各専攻の先生方もお招きして、新入生の皆さんの専修決定に向けて、先生方から直接情報を得られるチャンスづくりにありました。そこで、哲学講座（哲学専修）、文学講座（国文学・中国文学・英米文学・ドイツ文学・フランス文学）、史学講座（日本史学・東洋史学・西洋史学）、知識システム講座（心理学・言語学・芸術学）、社会文化講座（社会学・美術史学・地理学）の5講座別にテーブルを分けてセッティング。午後3時、文窓会池上会長、佐々木人文学研究科長のごあいさつと共にスタートしました。

先生方、上級生を入れて総勢約100名、うち1年生は約35名。熱心に話し込む光景があちらこちらで見られ、少人数制学部ならではの和やかな雰囲気が印象的でした。

終了後、1年生の女子学生たちに感想を聞くと、「最初は先生に話しかけるのに緊張したが、興味のある専修の話が聞けてよかった」「具体的にどんなことを学ぶのかがわかり、とても参考になった」といった声が、またある4年生からは、「自分に合った専修かどうかで大学生活が大きく左右される。私たちのときにもこんな企画があったら、とうらやましく思った」という声がありました。学生と先生を結ぶこの企画は、来年度以降も文窓会から学部への貢献企画として継続していきたいと考えています。

ロック調「パッヘルベルのカノン」を熱演。（西洋史大学院1回生の新宅秀歩さん）

神戸大学応援団総部創立50周年記念

21世紀にふさわしい神戸大学のニュー・カレッジソング
文学部 津田 薫さん(2010年卒)の作詞で誕生!

昨年の「文窓」でもご案内した「ニューカレッジソング」歌詞募集は、選考の結果、最優秀作品賞(採用歌)に文学部4回生(当時/人文学科フランス文学専修)の津田 薫さんの作品「光と風のハーモニー from Kobe」が選ばれました。曲は、去る5月3日に開催された神戸大学応援団総部創立記念式典・祝賀会にて、選考結果発表と表彰のあと吹奏楽部の演奏で初披露されました。見事採用歌に選ばれ、記念式典に招待された津田さんの喜びの声をお届けします。

●とても気持ちのいい歌詞ですね!

津田　神戸大学は、どのキャンパスにも自然の美しさが有り、広い空から太陽の光が降り注ぎ、海と山は、季節ごとの風を運んでくれます。そのような自然の美しさと、光と風の中で、勉強やクラブ活動をしたり、友達と話したり、そんな神大生の爽やかさを歌詞に込めました。

●これから歌い継がれていく歌詞の中で、特に表現したかったことは?

津田　1番から3番を通して、歌詞の中に「友の笑顔と共に」という言葉がありますが、どのような道も、歩いていくのは一人ではなく、友達や仲間の笑顔と一緒に喜びを分かち合い歩いていけたら、より心に安らぎや希望、勇気が溢れるのでは、と思いました。

私自身、文学部での2年間で「友」というのは、とても大切な存在で、笑顔に励まされたり、優しさに心の平安を感じたり、そして、頑張る勇気をもらったり、また、学ばせて頂く機会も多くありました。

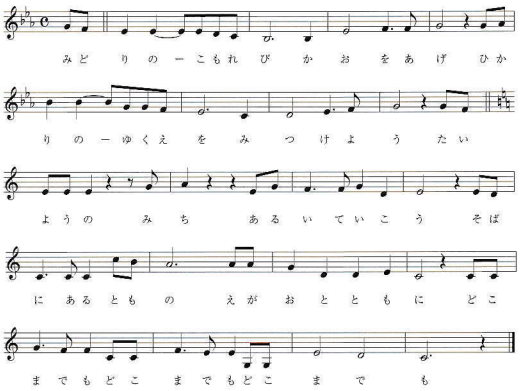
●晴れやかな記念式典・祝賀会で、曲として聴いたときの感想は?

津田　式典の後の祝賀会で、開会のご挨拶や来賓の祝辞などに続き、応援団合唱隊の方々による、ニューカレッジソングの曲紹介がありました。応援団吹奏楽部15代 現ヤマハの内藤雅子さんの作曲、応援団吹奏楽部31代 現宝塚歌劇団の佐々田愛一郎さん編曲のニューカレッジソングは、曲がとても素敵で、軽やかな中にも荘厳さがあると思い、感動しました。

ニューカレッジソング

光と風のハーモニー　from Kobe

津田薫 作詞　内藤雅子 作曲



1. 緑の木漏れ日　顔を上げ
光の行方を　みつけよう
太陽の道　歩いていこう
そばにある　友の笑顔と共に
どこまでも　どこまでも　どこまでも

2. 桜の小径を　駆け抜けて
やさしい春風　感じよう
花びらの道　歩いていこう
そばにある　友の笑顔と共に
いつまでも　いつまでも　いつまでも

3. 水色の風は　海からの
贈り物この手に受け止めよう
虹色の道　歩いていこう
そばにある　友の笑顔と共に
これからも　これからも　これからも
神戸の光と風と共に

応援団総部が創立50周年行事を開きました。

五孝隆実　史学科東洋史専攻　14回生

神戸大学応援団総部が今年創立50周年を迎えました。他大学の応援団のイメージから、なんとなく文学部とは縁遠いと思われるかもしれませんが、応援団総部で活動した文学部の学生は意外と多いのです。5月3日、神戸市中央区のANAクラウンプラザホテルでの創立記念式典・祝賀会には池上淑子文窓会長も出席されました。

応援団総部は1960(昭和35)年に生まれました。創立理念に「神大人の意識高揚」を掲げたのは、当時「たこ足大学」で、総合大学といっても学生の意識がばらばらだったためです。野球やアメリカンフットボールなど運動系サークルの試合の応援にはせ参じたり、文化系サークルの発表会に観客として参加したりして、ともに神戸大学で学んでいるんだという気持をもってほしいと考えたからです。大学祭の園遊会も1961年からずっと応援団総部が主催しています。

創立記念事業の一つとしてニューカレッジソングをつくろうと動いたのも、キャンパスでうたえる共通の歌をつくりたいと思ったからです。昨秋、歌詞を募集し、文学部を今春卒業した津田薫さん(人文学科フランス文学専修)の「光と風のハーモニー from Kobe」が入選しました。創立記念式典・祝賀会に津田さんをご招待し、吹奏楽部の演奏で福田秀樹神戸大学長、高崎正弘神戸大学学友会長はじめ約700人を前に初披露しました。軽やかな歌です。文窓会の方々もホームカミングデイなどで聞いていただき、ご一緒に歌っていただけたらなあと思います。

振り返れば六甲の山並み～あの頃の友に会いたい

第5回 神戸大学&文学部ホームカミングデイ2010

── Kobe University Homecoming Day 2010 ──

10/30(土)

神戸大学ホームカミングデイ2010

午前中は、出光佐三記念六甲台講堂(登録有形文化財)にて記念式典が開催されます。(※招待者のみ)

※詳しくは下記のホームページを参照。
第5回 神戸大学 ホームカミングデイ
http://www.kobe-u.ac.jp/hcd/2010/index.htm

KOBE UNIVERSITY

文学部ホームカミングデイ2010

13:00～13:30	受付 **会場 文学部 B棟152号室**
13:40～13:50	文学部長挨拶
14:00～15:00	渡邊孔二名誉教授による講演会 「ジョナサン・スウィフトの自伝的断片をめぐって」
15:00～15:10	大学院GPプロモーションビデオ放映
15:15～15:40	第4回文窓賞(学生レポートコンテスト) 入賞者授賞式
15:40～16:10	文窓会総会
16:20～18:00	懇親会 **瀧川記念学術交流会館** (参加費: 3,000円)

＜併設企画＞ 13:20～16:30
(文学部 B棟152号室前)
・地域連携センター ・海港都市研究センター
・倫理創成プロジェクト
・日本語日本文化教育インスティテュート
・大学院教育改革支援プログラムの関係展示

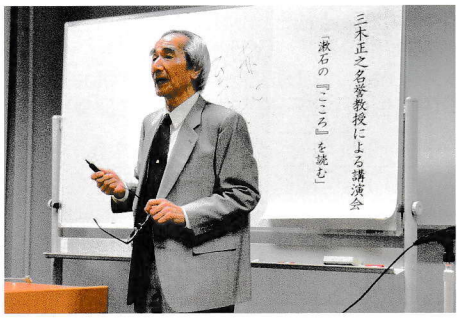
■お問い合わせ先 人文学研究科総務係
〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1 Tel: 078-803-5591

※詳しくは下記のホームページを参照。
文窓会(文学部同窓会)
hhttp://www.kobe-u.biz/bunsokai/

※第4回文窓賞(学生レポートコンテスト)入賞者の作品は、ホームページ「文窓」でお読みいただけます。

(昨年の文学部ホームカミングデイの様子です。)

2009年10月31日(土)に開催の第4回文学部ホームカミングデイでは、佐々木文学部長のごあいさつに引き続き、三木正之名誉教授による講演会「漱石の『こころ』を読む」を傾聴しました。キャンパスから遠ざかってン十年、あの頃に戻って聴く講義は何と楽しく心にストンストンと落ちていくことか、これはホームカミングデイならではの新鮮で贅沢な体験といえます。



第3回文窓賞(学生レポートコンテスト)入賞者授賞式では、初々しくも頼もしい入賞者の皆さんに惜しみない拍手が贈られました。

豪華なお料理が並ぶ懇親会は、関東や中部からも参加いただき、教職員、在校生とも交流できる一体感で包まれた楽しいひとときでした。

今年もぜひ誘い合わせてご参加ください!!

文窓会主催・卒業記念ウェルカムパーティ

3月25日(木)卒業式・修了式を終えた、晴れ着姿の卒業生たちを招いて、LANS BOX2階で文窓会主催の平成21年度卒業祝賀会が開かれました。あいにくの雨、でも会場ははじけるような熱気でいっぱい。社会へ、大学院へ…進路はそれぞれ違っても、このつながりを大切に!文窓会はいつも皆さんの心の応援団でありたいと願っています。先生方や職員の皆さまもきっと同じだと思います。

東京支部便り

第7回文窓会東京支部総会

日　時　2010年6月21日　14時から17時まで

会　場　神戸大学東京六甲クラブ（旧称：凌霜クラブ）

出席者　（敬称略・順不同）

守本保彦（28年）　竹歳一夫（32年）　廣瀬祝子（32年）
高見秀史（33年）　河野房子（35年）　西原重夫（35年）
小宅信吾（35年）　白藤禮幸（36年）　橋本静子（36年）
五味尚子（37年）　松澤昭史（40年）　吉田素子（40年）
田中　勉（47年）松原悦枝（54年）杤尾 武（専修36年）
廣野幸夫（本部幹事長、43年）中野 裕（36年）計 17 名

主な議題

1)凌霜クラブの改革：

①凌霜クラブは1966年（昭和41年）凌霜会東京支部総会でクラブ開設が承認された。その後1970年（昭和45年）に現在の帝劇地下2階に移転。2010年3月、神戸大学東京凌霜クラブ40年史「躍進」発刊。（会員は一冊贈呈を受ける、他は一冊1,000円にて販売）

②凌霜クラブは、全学部の卒業生・現役が利用しやすい東京の活動拠点とするため、新たに「神戸大学東京六甲クラブ」として、スタートすることになった。（六甲は神戸の地、神戸大学を象徴する言葉として採用するもの）

③本年1月に全学部OBの参画を得て発足したクラブ改革プロジェクト委員を加え改善策を検討。

（1）組織の改善及び規約の制定・改訂プロジェクトチームはクラブの運営体制、凌霜会の新体制。規約などを立案し、クラブの一般社団法人化を目指し検討。

（2）会員の増強　（3）会費の増収　（4）名簿整備プロジェクトチームは目的に沿った諸施策を立案中。

（5）ホームページ改善チームは現行のものを大幅にリニューアルし、若手会員増強のためイメージアップした使い勝手の良いホームページを立ち上げる。

2)神戸大学東京六甲クラブの2010年度の活動方針と行動計画

活動方針

①魅力あるクラブ作り（行事の企画と運営の拡充・会員の満足度向上）

②財務・収支の健全化（会員の増強と会費の増収・名簿の整備）

③各学部OB会との連携強化と大学への支援・協力（広報の充実・ホームページの改善）

行動計画

火曜会、若手の会、特別火曜会、木曜会、ゴルフ会、映画鑑賞会、ミドル会、音楽会、ビアーパーテイ（夏）、忘年会（年末）、新年互礼会（年初）、総会、学友役員会、クラブ役員会、合同役員会など。

3)学友会役員会：

学友会東京の役員会は下記の9同窓会（11学部※詳細は裏表紙）により構成されている。3ヶ月に一度開催。

文窓会としては、役員：中野・五味・松澤の三名が参加している。

文窓会、紫陽会、凌霜会、くさの会、神緑会、神戸大学工学振興会、六條会、海神会、翔鶴会。

木曜会（文学部担当）

日　時　2010年6月21日（月）18時から20時まで

出席者　参加者数は30名。うち文学部は14名（講師を除く。）

講師と講演内容　堀江珠喜様（1982年神戸大学大学院文化学研究科＜博士課程＞修了。学術博士号取得。現在の役職：大阪府立大学総合教育研究機構教授）

テーマ「いい加減な人ほど英語が出来る」

同名の書物も出版されて居りますが、今までの永年にわたる教師生活及び海外での実体験をもとに、数々の例を引き合いに出し、明瞭且つ緻密、それでいてユーモアたっぷりな講演であり、大変感銘を受けました。

凌霜クラブが、全学部の卒業生・現役が利用しやすい東京（日比谷）の活動拠点「神戸大学東京六甲クラブ」としてスタート！

神戸大学東京六甲クラブ
千代田区丸の内3-1-1 帝劇（帝国劇場）ビル地下2階
（地下鉄日比谷線日比谷駅・地下鉄千代田線日比谷駅・地下鉄有楽町線有楽町駅・地下鉄都営三田線日比谷駅B3出口すぐ、JR有楽町駅西側5分）
TEL：03-3211-2916・FAX：03-3211-3147

文窓会 東京支部会長：中野　裕（36年卒）
支部副会長：五味尚子（37年卒）　支部副会長：松澤昭史（40年卒）

お願い

「返事なし」撲滅に、ご協力下さい。

今回の総会・木曜会の案内を下記のように出したが、「返事なし」が多い。

●Eメール：133名に発信（返事あり：51名、返事なし：82名）
●ハガキ関係：51名に郵送（返事あり：29名、返事なし：22名）
※今回本部から2010年度支援金5万円いただきこれにて通信費及び茶話会の補助とした。バックアップに感謝。

メル友（FAX可）に今後のご案内をします

催物（木曜会、特別火曜会、若手の会、ミドル会、音楽会、映画鑑賞会、ゴルフ会、新年互例会、忘年会など）の案内をお送りする予定です。

●FAXでの連絡をご希望の方：凌霜クラブから直接ご自宅に送付。
●新たにメールアドレスを取得された方：下記にご連絡を下さい。

〒223-0064　横浜市港北区下田町1-1-1-113
電話（ファックス共用）　045−561−6317
メールアドレス：y.nakano.1938-panda@d9.dion.ne.jp
昭和36年卒（9回生）　中野　裕（文窓会東京支部長）

中部支部便り

第6回総会・懇親会

文窓会中部支部の第6回総会・懇親会が5月22日、名古屋・池下のホテル「ルブラ王山」で、神戸から参加の日高健一副会長、廣野幸夫幹事長を加え18人の会員が集まって開かれた。今年は静岡県三島市から難波寿子さん（昭和37年、国文）、岐阜県各務原市から長谷川義彦さん（昭和41年、西洋史）が、初めて出席した。

勝原博支部長は、昨年のホームカミングデーの様子を報告したあと、「今年からEメールでの連絡を呼びかけたところ、約30人から快諾を得た。事務作業の軽減を図るため今後も推進したい」とあいさつした。文窓会本部の廣野幹事長は、文窓会の新たな取り組みを紹介した。引き続いて第5期の活動報告、役員改選、会計報告が行われ、全員で了承した。

記念講演「言語行為にみる中国社会」張勤さん(中京大学教授)、そして懇親会

記念講演は、中京大学教授の張勤さん(平成8年、文化構造学博士課程)が、「言語行為にみる中国社会」のタイトルで、命令、謝罪、挨拶のケースを想定して中国語と日本語の違いを話した。そして「中国は多民族の社会で、お互いを警戒するよりも、(言語行為により)まず自分の土俵に取り入れる必要がある。これは一切の行動原理である」と結論を導いた。

懇親会は日高副会長の乾杯発声で始まり、張さんの講演への感想や質問、出席者の近況報告があり、それなりに有意義な時間と空間を楽しんだ。

今回の講演・懇親会には経済学部OB、法学部OBも出席した。第6期中部支部の世話係は、勝原が引き続き担当する。

(文窓会 中部支部長　勝原 博)

文学会(文学部同窓会) ― 会計報告 ―

平成21年度収支計算書

(平成21年7月1日～22年6月30日)

収入総額	7,427,027	(当期収入 4,282,387)
支出総額	4,609,969	(当期支出 4,609,969)
差引	2,817,058	(当期差引△ 327,582)

22年度予算書

(22・7・1～23・6・30)

収入	7,377,058
支出	7,377,058
	0

収入の部	予算額	決算額	差異	22年度予算額
会費納入金	3,900,000	3,600,000	△ 300,000	3,900,000
協力金	800,000	601,000	△ 199,000	600,000
利息金	2,000	31,387	29,387	10,000
総会等会費	50,000	50,000	0	50,000
前年度繰越金	3,144,640	3,144,640	0	2,817,058
積立金取崩金	0	0	0	0
収入合計額	7,896,640	7,427,027	△ 469,613	7,377,058

支出の部	予算額	決算額	差異	22年度予算額
会議費	150,000	149,180	△ 820	150,000
事務印刷費	60,000	53,599	△ 6,401	60,000
通信交通費	150,000	95,430	△ 54,570	150,000
交際接待費	250,000	206,926	△ 43,074	250,000
協力金費	1,100,000	1,126,000	26,000	1,100,000
(学友会費)	(200,000)	(220,000)	(20,000)	(200,000)
(活動援助費)	(400,000)	(406,000)	(6,000)	(400,000)
(学術助成費)	(500,000)	(500,000)	(0)	(500,000)
会報費	1,700,000	1,472,786	△ 227,214	1,700,000
歓送迎会費	500,000	929,569	429,569	650,000
(卒業生対象)	(500,000)	(519,569)	(19,569)	(550,000)
(入会生対象)	(0)	(410,000)	(410,000)	(100,000)
総会幹事会費	350,000	308,263	△ 41,737	350,000
事業活動費	450,000	186,442	△ 263,558	350,000
慶弔費	100,000	30,000	△ 70,000	100,000
雑費	60,000	43,125	△ 16,875	60,000
積立金	800,000	8,649	△ 791,351	500,000
予備費	2,226,640	0	△ 2,226,640	1,957,058
支出合計額	7,896,640	4,609,969	△ 3,286,671	7,377,058

平成21年度財産目録

(平成22年6月30日現在)

科目	金額
Ⅰ資産の部	
(1)通常会計流動資産	
現金	42,279
(中央三井信託銀行)普通預金	20,650
(みなと銀行)普通預金	378,569
(脇浜郵便局)普通貯金	558,800
郵便振替	1,816,760
	2,817,058
(2)特別積立金	
(みなと銀行)定期預金	8,000,000
(みなと銀行) 〃	1,004,806
(みなと銀行) 〃	1,503,843
(郵便局)定額郵便貯金	8,210,000
	18,718,649
Ⅱ負債の部	
(1) 流動・固定負債	0
Ⅲ正味財産合計	21,535,707

事業年度に係る決算報告書を監査した結果、適正であることを認めます。

平成22年7月30日

会計監査　鞍井修一　印

会計監査　西川京子　印

気ままに本を開いたり

まぶしい空・街・海を眺めたり

友と語り合ったり

あなたも、ときどきは

心の、木陰のベンチに腰掛けて

あの頃に戻ってみませんか。

神戸大学文学部ホームカミングデイ2010　10月30日（土）

詳細はP13を

神戸大学学友会のご案内

神戸大学学友会は各学部同窓会の相互交流と大学の発展に寄与するため、同窓会の連合体として組織され、各学部同窓会から選出された人たちによる幹事会で運営されています。

具体的な活動としては、幹事会や大学役員との懇談会のほか、大学広報誌（KOBE university STYLE）編集委員会、神戸大学クラブ（KUC）運営委員会、データベース委員会などです。現在、学友会を構成している同窓会は下記のとおりです。

学友会会長は高﨑正弘凌霜会会長、相談役は前会長の新野幸次郎氏、事務局は神戸大学企画部社会連携課となっています。

神戸大学学友会を構成している同窓会

- ●文窓会（文学部）
- ●紫陽会（教育学部・発達科学部）
- ●社団法人 凌霜会（経済学部・経営学部・法学部・国際協力研究科）
- ●くさの会（理学部）
- ●社団法人 神緑会（医学部医学科）
- ●就進会（医学部保健学科）
- ●社団法人 神戸大学工学振興会KTC（工学部）
- ●六篠会（農学部）
- ●翔鶴会（国際文化学部）
- ●海神会（海事科学部）

「神戸大学クラブ」（K・U・C）に入会しませんか

神戸大学卒業生が学部の壁を越えて、交流をはかり親睦を深める集いがK・U・Cです。神戸、大阪、東京でそれぞれ別々にいろいろな活動を展開しています。神戸K・U・Cは元町の牡丹園に事務所を開き、講演会、読書会、ゴルフ、旅行など、楽しい催しを実施しています。

ご入会ご希望の方は　**TEL 078-334-1323** までご連絡ください。詳しいパンフレットをお送り致します。

（K・U・C運営委員　日高　健一）

編　集　後　記

09号に引き続き、今号でも巻頭取材を試みました。取材をお願いしたお二人は文窓会の役員で、“身内”びいきに見えるかもしれません。それでもあえてお願いしたのは、お二人の貴重な体験が、今タイムリーな日本と中国の問題を新聞やテレビとはまったく違うアングルで見られる、価値ある“ネタ”と感じたからです。これは会員皆さまにもシェアしなくては！本意をご理解のうえ、ご一読いただけると幸いです。

（たなかむつこ）

最近は文学部の存在価値が薄れてきているようだ。会長の挨拶にも人文学関係の苦戦が語られている。また今回の文窓賞には「文学部で何をするの？」と聞かれ意地を示したレポートが応募された。しかし今号の特集の2人の先輩を見ると、思いがけない出会いからそれを大きく花開かせ、自分の世界を拡げて活躍していらっしゃる。その基礎は人の心を考察する文学部の学びにあり、文学部の可能性を感じる。

（むとう　みやこ）

表紙の題字は、文学部国文学教授 福長 進先生にご依頼しました。

http://www.kobe-u.biz/bunsokai/　（検索→文窓会）